

閑谷覺から日清貿易研究所へ —福原林平とその日記『随感随録』等について—

土屋 洋*

目次

はじめに

1. 西毅一と中国
2. 福原林平とその日記『随感随録』について
3. 中国メディアのなかの福原林平

おわりに

はじめに

1670年に岡山藩主池田光政によって創設され、日本最古の庶民教育の学校と称される閑谷学校は、近世期における庶民の高い教育水準を支え、日本のいち早い近代化の原動力になったとして、今日、高く評価されている¹。もっとも、ここでいう「近代化」とは、たんなる「西洋化」の謂ではないだろう。明治期に至って閑谷覺として再興したこの学校で、学び、巣立っていった若者たちが向かった先は、欧米ではなく、むしろ中国だったのである。

本稿はこうして閑谷覺から中国へと巣立っていった若者の一人である福原林平（1868-1894）に着目し、彼の足跡を辿ろうとするものである。後述の通り、福原は閑谷覺長西毅一の薫陶を授かり、中国への志を抱いて、荒尾精によって上海に設立された日清貿易研究所に学び、のち日清戦争下の中国で捕えられて刑死した、いわゆる「閑谷三烈士」および「征清殉難九烈士」の一人である。戦争によって非業の最後を遂げる福原ではあったが、その短くも太い生涯からは、岡山と中国との関わりだけでなく、当時の最前線における日中関係のあり方をも窺うことができるだろう。というのも、彼は『随感随録』と題される日記を残しており、断片的ながらも、そこから彼の溢れんばかりの情熱とともに、日本における「組織的な中国問題研究の第一歩」と称される日清貿易研究

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科東アジア国際協力・教育研究センター准教授

¹ 旧閑谷学校を含む「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」（水戸市、足利市、備前市、日田市）は、2015年に文化庁によって「日本遺産」に認定された。http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/nihon_isan01.pdf

² 野間清「日清貿易研究所の性格とその業績—わが国の組織的な中国問題研究の第一歩—」（『歴史評論』167、1964）。

所における日常について、窺うことができるからである²。また、日清戦争下、捕らえられ死刑に処せられた福原は、中国メディアによっても大いに注目され、連日のように報道がなされた。このような福原の足跡を辿ることを通じて、中国側の視点を通じて、当時の日中関係を検証することも可能となるだろう。

以下、まずは福原が巣立った閑谷巒について、その師・西毅一の中国観を中心に見ていきたい。

1. 西毅一と中国

西毅一（1843-1904）、明治時代の教育者、政治家。天保14年7月16日生まれ。後藤松陰、森田節齋らにまなぶ。明治4年岡山県学校督事となり、学校改革、洋学振興、女子教訓所の設立につとめる。国会開設、自由民権運動を指導し、23年衆議院議員(当選2回)。晩年は閑谷巒で教育に専念した。明治37年3月28日死去。62歳。備前（岡山県）出身。旧姓は霜山。字は伯毅。号は薇山³。

明治期に荒廃した閑谷学校を再興し、巒長として閑谷巒の教育・経営に長年に亘る心血を注いだ西については、門弟の小林久磨雄の筆になる『西薇山』をはじめとして⁴。これまで少なからぬ顕彰や研究がなされている⁵。こうした西について、本稿がとりわけ関心を寄せるのは、「アジア主義の源流」とみなすことができるほどの彼と中国との深い関わりである⁶。すなわち、西はつとに自ら二度に亘って中国へと渡っただけでなく（1870年に上海、1879年に天津）、本稿で取り上げる福原林平をはじめとする門下生たちを中国へと送り出し、さらには三女艶子を同じ岡山出身でのちに中国で実業家として活躍する白岩龍平のもとへと嫁がせ、そのついで長男龍太と次男虎夫を中国に送り出すほどに中国に傾倒していたのである。

この西自ら「畢生の志」と述べる中国への思いについては、先学による丹念な検討がすでに行われている。それに拠れば、その志とは「国を思うこと篤く、儒学の伝統に身をおいて、私心というものを持たなかった西」が、日中の「相親しまざるべからず」を信条として、ともに列強侵略に対処せんとする姿勢を貫こうとするものだったという⁷。それはまた、早くから森田節齋等の「尊王攘夷思想に揉みに揉まれて育った」西が、列強の侵略に対して日中「合従之策」を講じて対抗すべきを訴え、二度に亘って中国へと渡るも、志半ばで帰国を余儀なくされ、ここに「自ら事に当たるの否なるを感じ、退きて予の志を継ぐべき人物を養成するの得策なるを知り、遂に閑谷山中に閑居」して、閑谷巒の門下生へと託された志でもあった。のち1889（明治22）年11月に上海に日

³ 上田正昭等監修『日本人名大辞典』（講談社、2001）。

⁴ 小林久磨雄『西薇山』（温古堂、1931）。

⁵ 和気町歴史民俗資料館『西薇山没後一〇〇年記念特別展』（岡山県立和気閑谷高等学校同窓会、財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会、2004）。また『閑谷学校研究』第8号（2004）では「薇山西毅一没後一〇〇年記念特集」が組まれている。

⁶ 中村義「アジア主義の系譜」（『東京学芸大学紀要（第3部門 社会科学）』43、1992）は、岸田吟香とともに西を「近代日中関係史の冒頭を飾るにふさわしい…。つまりアジア主義の源流とみなすことができる」としている。

⁷ 吉崎志保子「西毅一の中国への素志」（『閑谷学校研究』1、1997）。

清貿易研究所を開こうとして全国を遊説中であった荒尾精が閑谷巒を訪れ、荒尾に共鳴した西がその門下生福原林平と河本磯平、さらに高見武夫の三人を上海へと送り出した際には、「予其の志を果たさずと雖も蹶起して荒尾氏に従う福原河本の二志あり、今又高見子を加えて三子山中より雄飛するに至りたるならば、予二十余年の志今日初めて達すというべきか」と述べたという⁸。

このように西の志とは、中国と提携して列強に対抗しようとするもので、それはまた自ら果たし得ず、福原等の門下生へと託された志でもあった。ここでこうした西の志について、いますこし理解を深めるために、その名も「言志篇」という西の一文を見ておきたい。この一文は西が自刃して世を去る3年前の1901（明治34）年に書かれたもので、漢文で千字余りの短篇ではあるものの、元旦にあらたまつて、彼が生涯をかけた漢学への思いと日本、中国への志を記したものである。この一文は藤沢南岳や谷干城、三島中洲といった当時の名流たちの評語や識語を附して出版されており、この点から見ても、西がこの一文に強い思い入れを持っていたことが窺える⁹。以下、この一文を抜粋し、その訓読を掲げたい。なお史料の引用に際しては、漢字の旧字体を新字体に改め、適宜段落に分け、また引用者による読みがなと〔 〕書きの注記を施した（以下同様）。

漢学なる者は何れの学なるか。曰く天理に法り人道を修むるの学なり。…夫れ天下を修むるの公道は、乃ち是れ天下の公学なり。

…本邦 ^{いにしへ}古に漢文無し。漢文無しと雖も、漢文の載する所の父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、所謂三綱五常の道、固より既に具さに在り、特だ未だ名有らずして之を教うるのみ。…我が備前藩祖芳烈公〔池田光政〕も亦た学校を此の閑谷に設け、聖廟を築き、藤樹中江先生を師尊す。三百の列藩、学校の設くるに、皆な焉れ有らざる莫し。然らば則ち漢学は之れを国学と謂うも亦た可なり。皇統一系と天壤無窮は、斯道、斯文の未だ喪わざるを以てなり。漢土の如きは則ち斯文存すと雖も斯道行われず、冠履〔上下〕顛倒し、夷狄夏を ^{みだ}猜し、二十余世、四千年間の久しきに、騒乱相継ぎ、以て今日に至り、四百余州、億兆の生霊、塗炭に陥り、壊乱極れり。余故に曰く、漢学、漢土に出づるも、而れども其れ本邦に実行せらるるなり。

…夫れ漢文を廃し、而して漢学を棄つるは、即ち斯文を廃するなり。斯文を廃するは、即ち斯道を廃するなり。斯道を廃して、而して父子親無く、君臣義無く、夫婦別無く、長幼序無く、朋友信無く、礼儀無く、廉恥無く、放僻邪侈、風俗淫猥たりて、人心の腐敗し、世道の汚下するを患うや、抑そも未なるか、其の本乱れて未治まる者なるや否や。

〔中略〕

…是こを以て今より後、専ら漢学を修め、生徒に授くるに五倫五常三綱八目を以てし、自ら

⁸ 以上、同上参照。また、荒尾来岡の足取り等、岡山と日清貿易研究所との関わりを児島の野崎家文書から探る研究として、太田健一「日清貿易研究所覚書」（『倉敷の歴史』9、1999）参照。

⁹ 西毅一『言志篇』（松井於寛治、1901）。

治人の道を修め、以て其の徳性を涵養し、退けば則ち躬^みづから勤儉を行い、身を修め家を斉え、以て国家の良民たり、進めば則ち漢土に航し、漢土の人情を審らかにし、漢土の風俗を知り、以て漢土の言語に通じ、又た漢土の弊習を詳らかにし、而して唐虞三代、孔孟の遺教を明らかにし、其の風を移し、其の俗を易え、或いは其の商民と協力し、彼我の貿易の利を謀り、以て其の国を富まし、或いは其の志士と心を同じうし、列強蹂躪の侮を禦ぎ、以て其の国を強うし、益ます同洲同文三千年来唇齒の交を厚うし、東方君子国の力を以て、赤崙州〔中国〕治平の天地を開拓せん。是れ余畢生の志願なり…。

以上より、西が生涯をかけた漢学とそれに関わる日本、中国に対する「畢生の志願」がいかなるものであったのかが見えてくる。すなわち、西にとって漢学とは「天下の公学」という普遍的なものであり、それは「夷狄」に乱された中国ではなく、むしろ「皇統一系」の日本で実行されたものであった。したがって「国学」とも称しうる漢学が、欧化風潮のなか、棄てて顧みられなくなったのは、西にとって、「其の本乱れて末治まる」以外の何物でもなかった。こうしてかかる風潮を挽回するために、西は関谷で漢学を教え、さらに中国へと渡っては、その風俗を変え、富強を支援し、「同洲同文」の関係を深め、「東方君子国」の力によって「赤崙州治平の天地」を開かんと願ったのだった。

こうした西の志は、ともすると固陋の儒者のように映らなくもない。しかし西は、自ら関谷学校の「一大罪人」と述べる通り、かつては漢学を講じる関谷学校を、「文明進歩の妨碍」になるとの理由から破壊しようとしたほどであった¹⁰。またその中国観も、初めて現実の中国を目にした際、「生等此地に來り、親しく人情の美惡政治の特質を察するに、頽惰委靡、外に英仏の患有り。…隘陋として天下の刑執〔形勢?〕を察せず、各国を輕視して夷狄禽獸と為し、自ら華夏中国と稱す。その為す所反覆信無く〔一定せず信頼できない〕、却て夷狄禽獸に若かず。…生等嘗て此地の簡籍〔書籍〕を読み、その風教を欽慕すること久し。今親しくその政治人情を視るに、古の舜堯の治に非ず、実に嘆くべきかな」と述べていた通り¹¹、それはもはや中国を仰ぎ見るものでは決してなかった。

このように西はむしろ新たな時代に敏感に反応していたようであるが、こうした西に終始一貫していたのは、他でもなく、尊王思想であった。そもそも、西の師である森田節齋は尊王思想を掲げ、吉田松陰等の尊攘派の志士を輩出したことで知られるが、その森田節齋の師もまた江戸後期の儒者・歴史家である頼山陽であり、その大義名分論に立つ主著『日本外史』が幕末の尊王運動に大きな影響を及ぼしたことで知られている。こうした学統に連なる西は、当然のことながら、彼らから強い影響を受けていた。例えば、上に引いた「言志篇」中、漢学と国学の一致を説くくだりは、

¹⁰ 西毅一『薇山遺稿』下巻（西虎夫、1914）、「明治十七年六月七日第一回進級証書授与式講堂に於て」。

¹¹ 西毅一『西伯毅文稿』（年代不詳、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵）、「与花房香川両執事書」、原文は漢文。また山田芳則『幕末・明治期の儒学思想の変遷』（思文閣出版、1998）、155-181頁参照。

明らかに頼山陽の議論を敷衍したものであろう¹²。また西が閑谷巒で行った講義では、必ず『日本外史』を取り上げていた¹³。さらに西は、尊王攘夷論と国体論で幕末の志士に大きな影響力を与えた会沢安(号は正志齋)『新論』を繰り返し読んでおり、こうした後期水戸学の思想にも共鳴していたようである¹⁴。こうして培われた西の尊攘派としての面目は、次のような一文によく表れている。

制度文物、日新月改、典型を英仏に取らずんば、則ち法則を独魯に比ぶ。模擬修飾、稱して文明開化と曰う。文明開化、豈に模擬修飾の謂ならんや。人に貴ぶる者は、独立なり。国も亦た然り。日本は則ち日本なり。英に非ざるなり。仏に非ざるなり。又た独米魯蘭に非ざるなり。我が邦文久、慶応の際、斥攘の論、世に盛行す。今日の文明開化より之れを觀るに、動もすれば輒ち曰く、頑愚なり、固陋なり、其の策迂拙なり、と。嗚呼、頑愚、固陋、策略迂拙と雖も、我が日本をして我が日本の精神たらしむは固より貴ぶべし。…余は則ち依然として今日の斥攘論者なり。然りと雖も、自ら尊大を誇り、是非曲折を論ぜず、碧眼を惟れ悪み、赤髭を惟れ厭うの故態に非ざるなり。英若し我をして英たらしめんと欲すれば、則ち英を是れ斥くべし。仏若し我をして仏たらしめんと欲すれば、則ち仏を是れ攘うべし。独たらず、魯たらず、天地の間に独立し、而して我が日本をして我が日本の精神たらしめん¹⁵。

このように、西にとっては、「文明開化」の名の下に西洋を模倣し、日本が日本でなくなっていくことは、到底受け入れられないことであつた。「日本の精神」はなんとしても守らねばならなかつたのである。さらに、当時の中国を軽侮し、西洋を崇拜する人々の風潮に対しても、以下の通り、批判的であつた。

今、人、支那飢饉の慘状を聞くに、動もすれば輒ち曰く、其の民頑愚にして、運輸の便、開くを知らず、其の俗固陋にして、救恤の法、設くる能わず、其の愚笑うべし、其の陋憐れむべし、と。而るに魯土戦争の図を觀れば、則ち曰く、船艦巨砲の盛、壯とすべし、隊伍訓練の精、快とすべし、遠謀欣ぶべし、深略羨むべし、と。夫れ支那飢饉の災いは、之を人事の然らしむる所と謂うか。魯土の戦闘は、之を天の然らしむる所と謂うか。文明開化の邦国と稱して、往々にして人国を攻め、人命を^{そこな}残い、尚お人をして快と呼び壯と稱して、欣慕止まざらしむる者有り。所謂弱肉強食、禽獸蛮野の行い、彼に在るか、抑そも此に在るか。戒めざるべけんや、畏れざるべけんや¹⁶。

¹² 頼山陽『日本政記』、卷之一、応仁天皇、論贊。

¹³ 閑谷巒編『閑谷巒史』(閑谷巒、1902)、56-57、86、93-94、132-133頁。

¹⁴ 西毅一『枕上集』(年代不詳、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵)、「読新論」、「再読新論」。なお中江藤樹、熊沢蕃山、山田方谷といった閑谷学校に力を尽くした儒者たちに継承された陽明学の学統が、西にも影響を及ぼしていたと考えられるが、いま考察を行う余裕はない。なお、閑谷巒の西の講義では、『玉陽明文粹』が読まれていた。

¹⁵ 前掲西毅一『薇山遺稿』上巻、「草庵時務策稿序」(1882)、原文は漢文。

¹⁶ 西毅一著、芳本鉄三郎編『薇山文稿』(武内彌三郎、1883)、「書魯土戦争図後」(1879)、原文は漢文。

この一文が書かれた1879（明治12）年は、「忠孝の大義」を重視する「教学聖旨」が示され、それまでの急激な西洋化にブレーキがかかり、儒教主義的な動きが復活する頃である。西のこの一文も、「文明」と称する西洋こそがむしろ「弱肉強食、禽獣蛮野」ではないか、と疑問を呈するものであった。こうした西洋に対する不信感が、漢学を振興し、中国の富強を支援し、ともに「東方君子国」による天地を開かん、とする先述の西の志の基底にあったと見てよいだろう。西はこの年の5月に二度目の渡清を行い、またそれから2年後の1881（明治14）年に西が中心となって閑谷巒の再興を果たしている。そして、それから約10年後の1890年、西はかかる「畢生の志願」を門下生であった福原林平等に託して、彼らを上海へと送り出すのである。

2. 福原林平とその日記『随感随録』について

2. 1. 福原林平について

福原林平は、1868（明治元）年、美作国東北条郡加茂町（現岡山県津山市加茂町）に生まれた。前述の通り、日清戦争下の中国で若くして刑死し、「閑谷三烈士」および「征清殉難九烈士」として祭られる人物である。彼を正面から取り上げる研究はこれまで存在しないようであるが、彼に対する追悼と顕彰は1894年10月の刑死直後から始まっている。「福原林平氏最後の書簡」（『日清交戦録』）、「通訳官福原林平君の伝」（『征清軍人忠死列伝』）、「福原林平君伝」（『生芻一束』）、「悼福原林平君文」（『詩文』）、「福原林平蛮敵ノ惨刑ニ逢フ」（『征清美談—教育勅語一』）等がそれである¹⁷。

「福原林平氏最後の書簡」は、閑谷巒出身でのちにジャーナリストとして活躍する牧卷次郎が福原の郷里で書き写して師の西毅一に送ったという福原の書簡と牧の西宛ての書簡を掲げている。福原の書簡には「日本志士たるもの大君のため神州のため刻苦しまするは此時」等の言葉が見える。

「通訳官福原林平君の伝」も同じくこの両書簡を掲載する。『生芻一束』は1895（明治28）年6月9日に岡山で福原と高見武夫、小西千吉の3名が合葬された際、会葬者に配布されたという小冊子であり、福原伝の他、西毅一「祭福原君洞巖文」および上述の福原書簡が掲げられている。「悼福原林平君文」は、福原同様、西の門下生であった池上雪堂が漢文で記したものであり、閑谷巒に伝わった福原の悲報を記している。

ここではひとまず、福原の閑谷巒在学当時の様子が窺える師・西毅一の撰になる「祭福原君洞巖文」を、以下の通り、抄録しておきたい¹⁸。

君、作北の深き山中に生まる。豪邁卓絶にして、満身是れ胆、蘇子〔蘇軾〕の所謂「忠義、骨

¹⁷ 『日清交戦録』18号（春陽堂、1894）、伏木誠一郎編『征清軍人忠死列伝』（伏木誠一郎等、1895）、中野寿吉『生芻一束』（中野寿吉、1895）、『詩文』3巻101集（共遊舎、1895）、上野羊我編『征清美談 教育勅語』（吉岡平助、1896）。『生芻一束』は岡山県立図書館蔵、その他は国立国会図書館（デジタルコレクション）蔵。なお中野寿吉は西の門下生で『閑谷巒史』を編纂した人物である。

¹⁸ 同上中野寿吉『生芻一束』所収。原文は漢文。

髓^{うづ}を填^こむ」とは、吾れ君に於いてか之を見ん。
君、常に宋の文天祥の為人を慕い、曰く、「丈夫寧ろ玉碎すとも、何ぞ能く瓦全せん〔どうしていたずらに身の安全を保とうか〕」〔『北斉書』〕と。其の国を憂い世^{なげ}を慨^{あは}くに至りては、則ち感憤淋漓し、義氣激昂し、覚え^まず血海〔泪？〕^{こも}交^まごも下る。君、夙に東洋の大勢に著眼し、雄心勃勃、抑えんと欲するも抑うる能わず、荒尾氏日清貿易研究所の設くる有るに及び、躍然として清国に航し、留学すること数年、業卒り帰りて其の親を省し、將に再び遊ばんとするなり。…聞くならく、君の節を南京に殉ずるや、死に臨みて殊に従容として曰く、「吾が事畢れり」と。嗚呼、平素学ぶ所に背かずと謂うべし。



君平林原福

図1 福原林平像 出典：『生芻一束』

福原が慕ったという南宋末の忠臣・文天祥は、その「正気の歌」が藤田東湖や吉田松陰といった尊王の志士に愛謡されたことで知られるが、西もこれを好んでいたようである¹⁹。この文天祥を含む中国古今の忠臣8人の遺文を選集し、幕末の尊王論に大きな影響を与えたという浅見綱齋『靖献遺言』は、閑谷巒の講義で必ずと言ってよいほど取り上げられたものである²⁰。福原が死に臨んで述べたという「吾が事畢れり」という一言も、文天祥が処刑されるに及んで発した言葉であった。

この後、年月を経ると、さらに資料が加えられ、よりまとまった福原の伝記が書かれるに至る。アジア主義関連の二大伝記著作たる黒龍会編『東亜先覚志士紀伝』ならびに東亜同文会編『対支回顧録』に収録されたものがそれである²¹。とりわけ『東亜先覚志士紀伝』上巻の本伝部分には、「楠内友次郎福原林平の殉難」という一章が割かれ、その師西毅一の事績も含む福原の生涯について、10頁以上に亘る紹介がなされている²²。黒龍会は1901年に内田良平らによって結成された国家主義・アジア主義団体であり、本書は同会主唱の下、諸団体の参加を得、明治初年以降の東亜先覚志士の隠功を顕彰することを目的として編纂されたものである。編纂に協力した25名のなかには西

¹⁹ 前掲西毅一著『枕上集』、「読宋文天祥正気歌」。

²⁰ 註13に同じ。

²¹ 黒龍会編纂『東亜先覚志士紀伝』上・中・下巻（黒龍会出版部、1933-1936）。（東亜同文会）対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』上・下巻（同編纂会、1936）。この他、西毅一の三十年祭の際に編纂された岡山県開谷中学校編『西薇山先生と閑谷三烈士』（岡山県開谷中学校、1934）に収録される白木豊「閑谷三烈士」も福原の網羅的な伝となっている。

²² 前掲黒龍会編纂『東亜先覚志士紀伝』上巻、434-446頁。

毅一の娘婿であった白岩龍平もその名を列ねているから、福原を始めとする閑谷巒関係の記事は、彼による資料提供や供述があったと見てよいだろう²³。以下、この「楠内友次郎福原林平の殉難」から、福原の生い立ちから閑谷巒、日清貿易研究所入学に至るまでの記述を抄録したい。

福原林平は岡山の産で、少年時代から胆気に富み、渾身是れ胆ともいふべき快男児であつた。それだけ又彼に就ては多くの逸話が留められてゐて、研究所出身者中の異色ある一人物である。福原が少年時代に学んだ備前の閑谷巒は、名君の聞え高き池田新太郎少将光政の創設に係り、本邦に於ける藩校としては最古の歴史を有する…。

西薇山は…天下の名校閑谷巒が廢絶に帰せんとするを慨き、明治十六年自ら巒長となつて之を再興するや、当時世間を風靡せんとしつゝあつた

欧化熱に反抗して毅然たる国士を養成すべき独特の巒風を振起し、学科の如きも英、漢、教等の範囲に止め、主として人格の陶冶に重きを置く教育を行つた。而して彼が閑谷巒の特長として力を致したのは漢学で、その教科書としては、史記、日本外史、靖献遺言等の如きものを用ひ、字句の解釈よりも其の書の精神に徹することを尚び、薇山流とも称すべき独特の朗読法によつて素読に重きを置いた…。

福原が閑谷巒在学時代は、短軀ながらも精悍剛毅の風を帯び、一面非常に感激性に富んで、靖献遺言等を朗読してゐる裡に感極まって声涙俱に下るといふやうな事が少なくなかつた。「丈夫寧ろ玉碎すべし、何ぞ能く瓦全をなさんや」といふのが日頃の口癖で、一たび決心すれば如何なる事も成し得ざることなしといふおもむき概があつた。或時友人が戯れに食卓上の皿を指して「如何に剛毅な福原君も此の皿を食ふことは出来まいと言つた処「何ッ、この皿位のものが食へないことがあるか」と言つて、取上げるや否やボリボリと噛み砕き其儘嚙み込もうとするので驚いて押し止めたことがあり、又学校が休暇になって友人等と郷里に帰省する途中、最早日も暮れて四辺が暗くなつた頃、同行してゐた数人の同窓生が暗くなつた断崖の下を見下しながら「誰もこゝから飛び降りる勇氣はあるまい」と言つた処、福原が「何ッこれ位の処から飛び降れなくてどうする」といつたと思ふと、語もまだ終らぬ裡に身を躍らして高さも知れぬ断崖

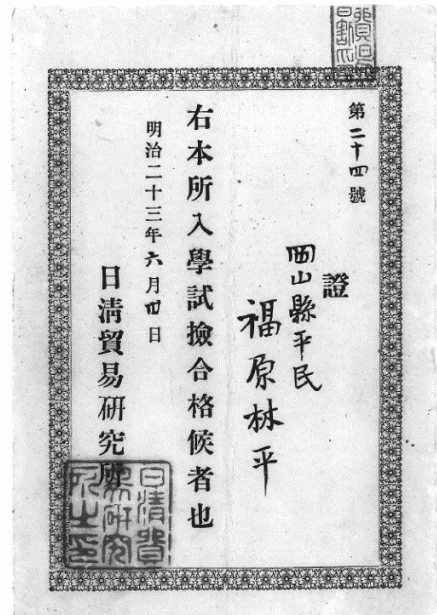


図2 福原林平 日清貿易研究所
入学試験合格証

²³ 同上上巻、凡例。

の上から暗闇の中へ飛び降りてしまった。一同は福原が気絶でもしなかつたかと案じてみると「オーイ、待つとれ、今登って行くから……」と彼の元気な声が聞えたので始めて安堵したといふ逸話も残つてゐる…。

また、日清貿易研究所の入所に関する次のようなエピソードも記されている。

彼〔福原〕は当時神戸で或る支那人と共同して燐寸の製造及び輸出を営んでみたが、荒尾の計画を聞いて発奮し、事業を抛つて態々受験のため上京した甲斐もなく成績が発表されたのを見ると不合格となつてゐた。慷慨家の彼は直ちに荒尾の寓を訪れて面会を求め「先生の計画は国家有要の人材を養成するのが目的でありませう。然るに英語や数学が少し許り出来るとか出来ぬとかといふことを標準にして採否を決するのは、大きな間違ひではありませぬか。そんなことよりも真に国家の用に立つ有為の人物かどうかを吟味して採否を決するのが至当です。さういふ僕は不肖ながら……」と備前閑谷巒の西薇山お仕込の気節凛々たる態度を以て膝詰談判を試み、入所を許可されねば挺でも動かぬ気色を示した末、遂に荒尾を動かして合格者の仲間入りをしたのであつた…。

以上、脚色もあろうが、福原の閑谷巒で培われたであろう剛毅な人となりを探ることが出来る。

2. 2. 福原林平『随感随録』について

こうした福原の人となりをより生き生きと我々へと伝えてくれる史料が存在する。それは福原自筆の日記『随感随録』である。

この『随感随録』は福原家に蔵されるもので、2014年に加子浦歴史文化館で開催された企画展「閑谷と中国一閑谷山中から上海へ」に出展された際に²⁴、文化史研究家である村上節子氏のご協力をいただき、福原家のご了承の下、その写しをご提供いただいたものである。

この書は、横本1冊、全66丁、表紙には「明治二十三年臘月 洞巖（日新）随感随録一」と題される（図3）。洞巖は福原の号である。また「随感随録二」以降が存在したのかは不詳。見返しには「明治二十六年七月吉日 福原林平私行」と見える。序跋の類は付されていないが、本文末に友人と思しき一学生による読後感が書きつけられている。本文となる日記部分は、明治23（1890）年12月15日から明治24年2月14日までの約3か月に亘って記されている。数日間が空いたり、記述の多寡に差があったりはするが、おおむね毎日記されている。福原が日清貿易研究所の第1期生として同所に入所したのは1890（明治23）年9月のことで、3年の課程を終え、卒業したのは1893（明治26）年6月のことであったから²⁵、この日記は福原が日清貿易研究所の1年次に記され、また卒業直

²⁴ 村上節子「展示報告 加子浦歴史文化館企画展「閑谷と中国一閑谷山中から上海へ」」（『閑谷学校研究』18、2014）。

²⁵ 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』（滬友会、1982）、23-36頁。

後にまとめられたことになる。なお、福原は卒業後の1893年夏から11月まで岡山に一時帰省しているので²⁶、おそらくはこの時に留学生活の報告として、この日記を郷里に持ち帰ったのであろう。

日清貿易研究所は、1890年に荒尾精を中心に上海に設立された教育・研究機関であり、前述の通り、日本における「組織的な中国問題研究の第一歩」と評されるものである。この研究所の代表的成果である『清国通商総覧—日清貿易必携—』（1892）は、中国各地の実地踏査に基づくもので、全3巻の大著である。また、この研究所の設立へとつながる漢口楽善堂の活動を支援したのは、岡山出身のジャーナリスト・実業家で、上海楽善堂を経営した岸田吟香であった。この研究所の中心人物であった荒尾精と根津一がいずれも陸軍軍人であり、また日清戦争に

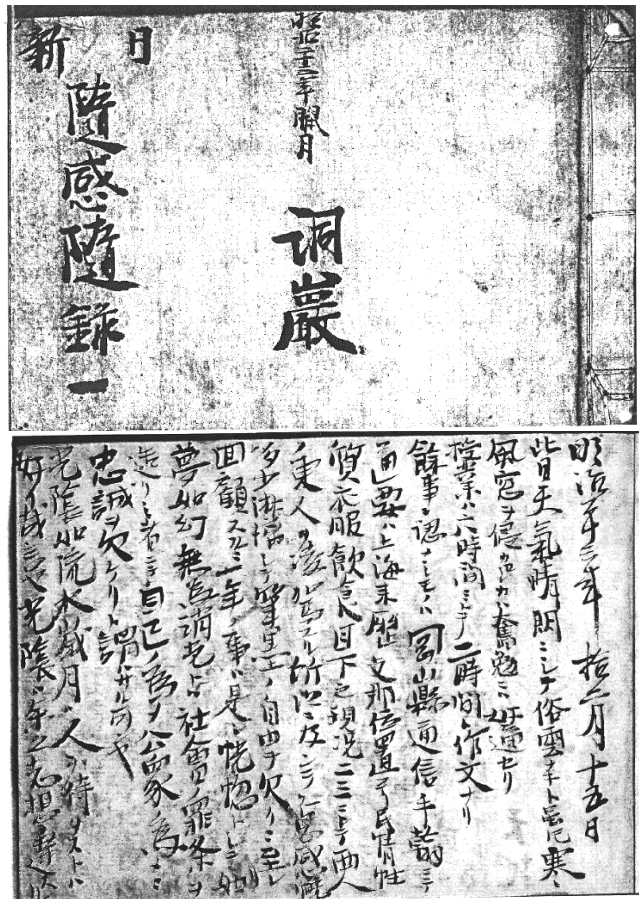


図3 福原林平『随感随録』表紙と巻首

際しては、後述の通り、福原を始めとする卒業生が通訳・諜報活動に従事したため、この研究所を「スパイ学校」、「謀略的機関」とみなす向きもある。しかし、今日では当時勃興しつつあった中国ビジネスを担う「経済人」や「中国研究人」の民間における「養成機関」であった、とする見方が主流であろう²⁷。いずれにせよ、同研究所が日本における組織的中国研究とアジア主義運動の揺籃というべき存在であり、上海にあって当時の日中関係の最前線に位置していたことについては異論がないだろう。

福原林平『随感随録』は、こうした日清貿易研究所での日々を綴ったものであるが、この書は主

²⁶ 前掲黒龍会編纂『東亜先覚志士伝紀』下巻、530-531頁、前掲閑谷巖編『閑谷巖史』、85頁。なおこの時、閑谷巖を訪れた福原と高見武夫を送るために、西は閑谷巖講堂で演説を行っている。前掲西毅一『薇山遺稿』下巻、「明治廿六年十一月十四日東京に臨み講堂に於て」。

²⁷ 以上、野口武「『日清貿易研究所』研究の整理と課題—東亜同文書院前史としての位置付けと荒尾精に関連して—」（『同文書院記念報』23、愛知大学東亜同文書院センター、2015）参照。

に次の二点で価値を有するものと考えられる。まず第一は、日清貿易研究所に関する一次史料としての価値である。すなわち、日清貿易研究所についてのある程度まとまった記述は、『沿革史』および『東亜同文書院大学史』に見ることができるが、いずれも二次的な史料である²⁸。近年、史料状況が大きく改善され、日清貿易研究所で生徒の監督にあたった宗方小太郎の日記をはじめとして、生徒であった高橋正二の手記・日記、同じく生徒であった向野堅一の書簡といった貴重な一次史料が発掘・紹介されるようになり²⁹、またこれらの史料を用いた着実な研究も現れている³⁰。福原『随感随録』もまたこうした貴重な一次史料の一つに数えられるべきものであり、わずか3か月の日記に過ぎないという憾みはあるものの、既存の史料と組み合わせることで、日清貿易研究所の日々をより具体的かつ多面的に浮かび上がらせることが可能となろう。

第二は、日清貿易研究所生徒の精神史としての価値である。すなわち、この福原『随感随録』は記された期間は短いものの、その代わりと言うべきか、一日一日の記述はかなり長い。しかもそれは単なるメモではなく、書名の通り、日々の思いや心情を独白調で記すものであり、感情の昂ぶりからか文字の判読も困難となることがしばしばであるが、福原という日清貿易研究所生徒の激情が吐露された貴重な記録となっている。これは他の日記の体裁と大きく異なる点であり、比較的読み応えのあるその内容は、この日記独自の価値となっていよう。

以下、この福原林平『随感随録』から、この日記の特徴をよく示すと思われる3日分の記述を選び、翻刻して示したい。

①明治23(1890)年12月15日の記述は、この日記劈頭のものであり、一日の時間割や勉学への意気込みが述べられる。ここに見えるような忠君愛国の熱意やそのために自己を律し、勉学に励まんとする意気込みは、この日記の全編を通じて繰り返し述べられるものであり、この日記の典型的な内容となっている。

②明治24(1891)年1月4日の記述は、所長根津一による訓話の筆記である。日記中、教員の訓話や講義の筆記は多くないが、重要なものについては日記に記したのだろう。根津一は、前述の通り、荒尾精とともに日清貿易研究所を運営した中心人物である。荒尾とは陸軍士官学校時代からの

²⁸ 松岡恭一、山口昇編『沿革史』(東亜同文書院学友会、1908)、前掲大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』。

²⁹ 大里浩秋「宗方小太郎日記、明治22～25年」(『人文学研究所報』40、2007)、同「宗方小太郎日記、明治26～29年」(『人文学研究所報』41、2008)、石田卓生「高橋正二『往清見聞録』第一、第二日清貿易研究所の学生による記録一」(『東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』5、2011)、向野康江「向野堅一記念館所蔵「向野書簡」目録(一～四)」(『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術)』62-63、2013-2014)。

³⁰ 向野康江「日清貿易研究所における学生生活―向野堅一の兄たちの書簡を手掛かりに―」(『アジア教育史研究』23、2014)、野口武「明治中期の貿易活動における日清貿易研究所の位置」(『同文書院記念報』24(別冊1)、愛知大学東亜同文書院センター、2015)、同『日清貿易研究所出身者の「立身」と教育機会(1)』(『愛知大学国際問題研究所紀要』147、2016)、同『日清貿易研究所生一覽表の作成と『対支回顧録』編纂をめぐる若干の考察』(愛知大学国際問題研究所『OCCASIONAL PAPER』5、2016)、石田卓生「日清貿易研究所の教育について：高橋正二手記を手がかりにして」(『現代中国』90、2016)。

盟友で、ともにこの研究所の構想を実現し、1890年11月初旬には研究所の資金難のため急遽帰国した荒尾に代わって所長を務めた³¹。日清貿易研究所の後を継ぐ東亜同文書院の院長も長く務めた根津については、すでにいくつかの伝記が編纂されており、また根津に関する専論も存在する³²。しかし、ここに見えるような日清貿易研究所時代の根津の思想を生々しく伝える史料は珍しいであろう。主な内容は、日本は将来天下商業の中心とならねばならず、研究所生徒はその「命脈者」「責任者」であるから、「大覚悟」が必要である、といったものである。生徒に向けた訓話のためか、「支那ヲ取ル」、「戦争アルハ望ムヘキ」といった過激な言葉も見える。もっとも、盟友であった荒尾も「支那へ行って支那を取ります。支那を取ってよい統治を施し、それによってアジアを復興しようと思います」と述べていたといい、竹内好はこれを評して、「彼〔荒尾〕は「占領主義者」かもしれないが、占領の目的は少なくとも私慾ではなかった」としている³³。

③明治24年1月29日の記述は、閑谷や郷里の父への思いが綴られたものである。郷里の父母への思いはこの日記の随所に綴られており、これはほんの一例に過ぎない。閑谷巒の教育方針が「孝」をなによりも重んじていたことが思い起こされる。日記中、「吾レハ是レ西翁ノ門人ナリ」（明治24年1月20日）といった西に言及する箇所も散見され、福原の心中での西の存在の大きさを窺うに足る。

翻刻に際しては、読みやすさを考慮して、漢字の旧字体は新字体に改め、合字はかなに改め、適宜読点を補った。原文の改行には従わず、追い込みとした。段落は原文同様に改め、冒頭一字を下げた。敬意を表するための平出は省略した。判読できない箇所には字数に相当する□を記した。その他、翻刻者による注記はいずれも〔 〕内に記した。

①明治23（1890）年12月15日

明治二十三年拾二月十五日

此日天気晴朗ニシテ俗雲ナキト雖モ、寒風窓ヲ侵セシカハ、奮勉ニハ好適セリ、授業ハ六時間ニシテ二時間ハ作文ナリ、余事ニ認メシモノハ岡山県通信手翰ニテ、通要ハ上海来歴、支那位置ヨリ、民情性質、衣服飲食、目下之現況二三ニシテ、西人ノ東人ヲ凌駕スル所以ニ及ンテ、不思議感慨多少淋漓シテ、筆墨ノ自由ヲ欠クニ至レリ、回顧スルニ、一年ノ事ハ是レ恍惚トシテ、如夢如幻、無為消光トハ社会ノ罪条ヲ造リシ者ニテ、自己ノ為メ公衆ノ為メニ忠誠ヲ欠ケリト謂ハサル可シヤ

光陰如流水、歲月人ヲ待タストハ好イ哉言ヤ、光陰ハ余ノ志想ヲ達スルヲ待タシテ去テ又

³¹ 東亜同文書院滬友同窓会編著『山州根津先生伝』（根津先生伝記編纂部、1930、のち大空社、1997）、22頁。

³² 同上、宗像金吾編『東亜の先覚者—山州根津先生並夫人—』（宗像金吾、1943）。根津の専論としては、比較的新しいものとして、大島孝雄「根津一の中国観」（『東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』4、2010）参照。

³³ 竹内好編『現代日本思想大系9 アジア主義』（筑摩書房、1963）、23頁。

夕帰ラス、夫レ果シテ然ラハ、現時ノ時コソ大事ヲ成スニ足ル天赋ノ良機ナレハ、良機ヲ失フ可ラス、良機ヲ活用シテ誤ルナクンハ、人性ノ本務ヲ尽セリト云フ可シ、若シ之ヲ忽ニセハ、大成ヲ欲セサルモノナリ、一日中倦怠睡眠ノ気分生スルハ、勉強中ノ艱難ナレハ、人ノ一事ヲ為ントスルヤ、艱難辛苦ノアラサルナク、心窮思屈セサルナキ、之ヲ忍ヘハ成リ、之ヲ忍ハスンハ不成、所謂百折不撓ノ古訓ハ時ニ及ンテ、直用スヘキノミ、何ソ今日ハ是レ軽過スト雖トモ、異日大成ヲ見ヨト呼フカ如キハ、事ヲ為ス能ハサルノ言ニシテ、事ノ成ラサル予言ヲ自ラ訴フルト云フヘキナレハ、天地人ニ恥ツルコト素ヨリ之ヨリ大ナルモノアランヤ

吾レ学オノ以テ人ニ過ルナシ、何ソ堪ン、今ヨリ非常ノ精意周到、緻密刻励、身倒ルカ学ナルカ、古英雄ノ心中、百折不撓ノ良心ヲ演テ、実行セン、学芸不成カ、異日ノ大成安ソ期ス可ンヤ、又タ衆望公属ニ応ス可キモノナランヤ、人ノ以テ余ヲ欽慕スル所以ノモノハ、心事ノ剛邁ニアリ、他ニアラスンハ、真ニ剛邁心ヲ用ヒンカ

今日ニ於イテハ一意専心、學術忍励スルニ於テハ、一点ノ俗気外想アル可ラス

忠君愛国ノ良心ヲ達センカ、今日學術大成ニ原因セスンハアラサルナリ、人ノ事ヲ為スニハ素ナクン〔ハ〕アラスシテ、異日ノ素ハ今日ノ光陰中ニアルナリ

光陰ヲ實用スルニ於テ、皇国ハ皇統連綿、天壤無窮ノ良国ナルヲ思フニ至リテハ、何ソ一片ノ他念アル可キモノナランヤ、皇国ノ命脈勝者タランモノハ他人ニアラサルナリ、自分其人ナリ、其責任者ナリ

責任者ニシテオ智ナキカ、如何ニ以テ皇天皇土ヲ維持スヘキヤ

事ヲ為スニハ順序ナカラサル可ラス、早起ヨリ十時ニ至ル迄、所長授ク所ノ科業ヲ熱心ニ修学、決シテ余念アル可ラス

余暇アレハ文章詩句ヲ習フヘシ

故郷ノ知友ニ通信ニ於テハ日曜日ヲ充ツヘシ、日曜日モ半日間ハ外出散歩、慨情感想、可笑ヲ記載、怠ル可ラス

手紙ハ信ノ存ス所ニシテ、社会ノ信又タ手紙ニ原スルモノナレハ、手紙ハ須ク丁寧懇懃ニシテ、至情至誠ヲ筆墨ニ溢レシムヘシ

前六時ヨリ十時迄ハ端正修学スヘシト雖トモ、記憶スヘキ者ハ勉テ記スヘシ

智識ハ博聞強記ナラサル可ラス

十時ノ黙検終ルヤ、最初ニ修英ノ後ハ修漢学文紀事ニ及^{〔ママ〕}スヘシ

非常ノ功ニ於ケル者ハ独り光陰活用ノ妙ニアルノミ

故二人ニ超過セント欲セハ、一日間ニ於テ人ニ卓^{〔ママ〕}超スルノ修得ナカラサル可ラス、一日間ニ於テ卓超スル所ナクンハ、決シテ積ミテ長江大河、浩蕩タル大洋タルコト得ヘキモノナランヤ、修学スルニ於テ外想他念ハ余ノ神経ニシテ、已ニ持口タルカ、此感念ハ忠君愛国ノ結氷ト雖トモ、融然之ヲ解イテ、修ムルナクンハ、火ニ発スルヲ得サレバ、到底真ニ忠君愛国ニ至ラ

サル可シ、所謂老悲ムヘシ、事成ラサルモノナリ、此ノ心ヲ知りナハ、熱心專一二、科目勉勵衆生ニ過超スル処アルヘシ

欠伸ハ放心意念ヨリ生ス、戒ムヘシ

水浴ハ身体ヲ強壮ナラシム、怠ル可ラス

紀事ハ常ニ一時又ハ二時ナル可シ

②明治24 (1891) 年1月4日

四日、午前五時起、昨日ハ、午前八時ヨリ午後八時ニ至リ、根津所長ノ室ニ到リ、談話ヲ拝聴スルハ、事ヲ為スハ時アリ、土地アリ、将来日本ハ天下商業ノ中心トナレハ、今ヨリ商政一致ノ運動ナカル可ラス、政事家ハ商業ヲ知ラサル可ラス、商業家ハ政事ヲ知ラサル可ラス、之ヲ失ヘハ、治国ノ要道ヲ欠ク理由、事ヲ為スハ精厲磨切スヘキコト、一事ニシテ其奥義明要ヲ知りナハ、変通自在ニシテ、研究所生徒ニシテ、商業ノ妙所ニ達シナハ、大臣ノ口子亦容易ノ事ナリ、豪傑ノ事ヲ為スハ一々事物ニ深溺スルモノナリ、算術ヲ攷ルトキニハ、口心算術ニ出テ、経学ナレハ全ク経学、語学ナレバ全ク語学、実務ナレハ全ク実務、何レノ境内ニテモ身其境ニ入り、其奥ヲ知ルノ明ナル可ラス、其科其事ヲ為スニ於テ区々トシテ余念アル如キハ、未ダ專ノ成ラサル人ノミ

事ヲ為スハ一々父母ノ許諾ヲ要スルナリ、父母ニ孝ナルモノニシテ、君主ニ忠烈ナルモノナリ、国家ヲ愛スルモノナリ、孝ハ万物ノ本元ナリ、万物ノ本元ヲ失フテ事ヲ為サハ、天地自然ノ理ニ合セサルヲ以テ、事ノ成ル理由アラサルナリ、今ヤ国ヲ治ル妙要ヲ知ルノ人ハ、経義ニ明達セシ人ニアルナリ、商業ハ活戦争ナリ、戦争ナレハ之ニ応用ノ妙ヲ得シ上智ノ人種、其利ノ多夥ヲ占ムル当然ナリ、研究所ノ生徒ハ戦争将校官、大将指^(マ)規官タルモノナレハ、任ノ重大ナルハ云フ迄モナキコトナリ、研究生徒ハ他日日本ノ政權、商權モ担、産業モ万機ノ原礎トナリ、海外万国ト強弱ヲ争フノ衝者トナリ、真ニ富国ノ製造者トモナリ、国權拡張者トモナリ、我国萬世ノ為大模範ヲ立ツヘキモノナリ、故ニ望ムラクハ孜々忍勵、充分ナル養畜アルヘキナリ、鳥尾ハ下官ニ居リナガラ、自ラ大臣ノ責任者ヲ任シテ事ヲ為セシ、故ニ各省ノ編法ニ預リテカアリシカ、常ニ為スコトニ於テ大臣ノ右ニ出ツルコト多シ、是レ自ラ重キヲ任スル所以ナリ、諸君ニ於テモ自ラ重キヲ任シテ為サザル可ラス、伊藤ハ近来覚ル所アリシト見ヘ、頗リニ支那古代ノ学文ヲ研究セリ、自ラ其任ニ當リ不可能ニ出合フテ、心筋ヲ練リ、頗リニ勇進スルハ英雄ノ本職ナリ、豪傑ノ胸中ハ磊々落々、快々濶々タルモノニシテ、天真爛漫ニ出テタラサルノモノハナシ、人ニ於テハ安心立命ヲ知ラサル可ラス、世ノ中ハ苦ハ楽ノ種、楽ハ苦ノ種ナレハ、楽ヲ得ン為メニ苦ノ種ヲ蒔カサル可ラス、本所生徒ハ苦種ノ時ナレハ、其時ヲ知ラサル可ラス

時ニ於テハ、夏ハ夏ノ時アリテ暖ナリ、冬ノ時アリテ寒シ、春ハ花ヲ開、秋ハ紅ナリ、皆ナ

義ナリ、之ヲ誤レハ、義ニアラサルナリ、冬暖ニシテ夏寒ナルカ、不義ナリ、人間ニ於テハ幼時アリ、壯時アリ、老時アリ、勉ムヘキ時アリ、為スヘキトキアリ、進ムトキアリ、退クトキアリ、時世ニトキアリ、農業時代アリ、工業時代アリ、文学時代アリ、商業時代アリ、今ヤ日本ハ農工ノカニテ軍備ヲ全センカ、力足ラサルアリ、止ムナク、海外貿易ヨリ外ナキナリ、海外貿易ヲ隆盛ニシテ、海外貿易ヲ以テ我国カヲ強盛ニセサル可ラス、貿易金カニテ我国ノ光輝ヲ天下ニ発スルヲ得ルタメニシテ、其实ヲ得ハ大孝大忠ノ至リナリ、研究生真ノ養畜ヲ為スニ於テハ、世界万般ノ事ニ達達自在ナラサル可ラス、才智ニ於テ欠点アラハ、事ハ成ラサルモノナリ、自ラ任スル重クシテ、以テ天下ノ人ヲ感鳴スルヲ勉メサル可ラス、諸子ノ前途ハ無上快樂ノ土地ナレハ、快樂ノ土地ニ達セン迄、航海ヲ取ラサル可ラス

本所生徒ハ国運命脈者ナリ、支那ヲ取ルコトハ容易ナリ、支那ヲ取りナバ、支那^{〔ママ〕}ヲ治道ヲ知ラサル可ラス、我ハ之ヲ知り、治ルナリ、支那前途ハ支那ニ英雄アラハ支那ノ国トナリ、日本ニ豪傑アラハ日本ノ有トナリ、西洋ニ豪傑アラハ西洋ノ有トナル、前途ノ支那ハ天下ノ供有物タルモノナリ、天下ノ供有物タレハ、何レノ手ニ落ツルモ知レサルカ、之ヲ取ルモ、之ヲ守ルノ方法ナカラスンハ、維持スル能ハスシテ、又タ之ヲ讓ラサルヲ得サルモノアリ

日本ニ於テハ、今日戦争アルハ望ムヘキナリ、海外ヨリ来ルモ、三万ノ兵ヨリ以上ハ来^{〔ママ〕}リ能ハサルナリ、英国人、印度ニ九万ノ兵アリ、東洋ニ応スルノ兵ハ九万ナリト雖トモ、充分全力ヲ盡シテ外国ニ来ルモ三万ニ過キサルナリ、一度ニ三万来リシ處ヲ、日本ニ六師団アレハ、充分防戦シテ勝利ヲ得ルモノアリ、若シ勝利ヲ得サルトモ恥ナキナリ、国ヲ奪ハルルノコトハナキナリ、一旦敗軍トナレハ、夥多ノ償金ヲ出サザル可ラサルナリト雖トモ、民心ハ之ニ因テ奮起シ、殖産工業ハ大ニ進歩スルモノナリ、日本前途ハ強権ナルモノナリ、即チ今日ノ運動者、士民等ニシテ、外国的ノ感想ナキモノニシテ、大ニ外国的ノ感想ヲ出スモノナリ

□□□ノ地、境開□ヘリヤノ□□モ□□セシ、前途日本ハ如何ナル境遇ニ到ルヤト云フニ、全国挙ケテ世界ノ一大港トナリテ、商業ノ中心タルモノナリ、有時トナレハ、民心眼ヲ覺マシモ、何ノ養ヒアリテ、競争上裡ニ立テ、勝利ヲ得ヘキモノソヤ、所謂雨雪ノ降り来ルヲ以テ窓ヲ附リト云フモノナルガ、預メ之レガ準備ナクンハ大風雨ヲ防ク能ハス、之ト同シク、其後ニ到ラハ、日本国民モ吾レ之ヲ為シト狼狽スト雖トモ、実ニ及フ可シヤ、其時ニ於テ本所生徒ハ變通自在、大ニ国家ノ大運動者トナリ、万機ノ基礎ヲ造ルモノナリ、此等ノ任ニ当ル責任者ナレハ、夫レ宜敷今日ニ於テ大覺悟ナカル可ラス

〔後略〕

③明治24年1月29日

二十九日、午前四時起テ讀書ス、水浴未タ以テ志想堅固不拔ナラサルナリ、志想堅忍ナラハ二時位ヨリ起ルヘシ

父上ヨ不幸ノ罪ハ恕シ玉ヘ、堅忍勲励シテ御高恩ニ報答致シマス

閑谷山中満朶ノ桜花将サニ開カントス、一言ノ以テ祝意ヲ表セサルヘケンヤ、閑谷幽谷黄鳥
谷間ヲ出テ、百花爛漫ノ間ニ吟詠セントス、一語ノ以テ

父上ヨ林ノ気分ハ壮快ナリ、奮勉不怠ヲ以テ本所ニ於テモ志想堅固ノ一人タリ、今後愈勇奮
シテ以テ父母ノ大幸福時代ヲ作り可申候間、何卒今暫ク御困難ヲ御忍ビ被下度候、実ニ以テ何
ントモ申訳ナキナリ恕シ玉ヘ、父上ヨ、父上ハ一家ノ滅亡モ意トセスシテ、林ヲ海外ニ遊ヒシ
メラレシ御高恩如何テ忘却スヘキ、生死ハ委任シテ、學術大成、志想剛毅、御父ノ英名ヲハ天
下ニ萬世ニ輝シ可申候間、父上ヨ、今暫ク大罪ヲ恕シ玉ヘ、三十一旦林兒

3. 中国メディアのなかの福原林平

日清貿易研究所を卒業した福原は、上述の通り、一時岡山に帰省したのち、1893年11月に再び上海に渡り、日清貿易研究所付属の実習機関であった日清商品陳列所で実地取引を練習していた。その翌年7月25日に日清戦争が勃発、開戦後間もなく、同じ日清貿易研究所の卒業生である楠内友次郎とともに、遼陽、奉天（瀋陽）方面の敵情偵察の任務に当たることとなり、8月10日に出発、湖北の商人と称して中国人旅館に投宿した。しかし、乗船を予定していた営口行の船の出発が遅れ、そのまま旅館に滞在するうちに挙動を怪しまれ、中国偵吏の捕縛する所となったという³⁴。捕縛されたのがフランス租界であったため、一旦フランス領事の手を経てアメリカ領事館に留置されたが、9月3日、上海道台衙門に引き渡され、さらに南京へと送致され、最終的には南京朝陽門外の刑場で斬刑に処せられた³⁵。

前掲の福原の伝記では、福原が処刑に至るまでの状況について、いくつかの異なる説が伝えられている。まず最初に福原の処刑時の様子に言及したのは西毅一「祭福原君洞巖文」であり、上述の通り、死に臨んだ福原は従容として、「吾が事畢れり」と述べたという³⁶。また西の門下生であった池上雪堂の「悼福原林平君文」も、その記述は西と重なり、刑に臨んだ福原は刑吏を一喝し、「我大日本、天皇陛下東に在り、吾何為れぞ北面せん…」と述べ、東に向かって刑に処せられたという³⁷。

³⁴ 以上、前掲黒龍会編纂『東亜先覚志士紀伝』下巻、530-531頁。この間の記載はこの福原伝が最も詳しい。なお、『陸軍省大日記』所収の「大本営附通訳官陸軍省雇員藤島武彦他清国に於て敵情偵察中死亡の件」に拠れば、福原は「大本営附通訳官陸軍省雇員」として敵情偵察の任に当たっていた。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C10060745200、明治28年 編冊（防衛省防衛研究所）。

³⁵ 前掲（東亜同文会）対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』下巻、587-590頁。この福原伝のみが福原がアメリカ領事館に留置されていたことを伝えている。なお、上海のアメリカ総領事が福原と楠内を中国側に引き渡したことで二人が最終的に酷刑に処せられたため、多くのアメリカメディアが国務長官を批判したという。外務省記録に残る「3. 上海仏居留地内旅宿ニ於テ岡山県人福原某、鹿児島県人楠内某ナル者間諜ノ嫌疑ヲ以テ捕縛セラレタリトノ件」には、アメリカ公使栗野慎一郎等の報告書の他、アメリカ議会に提出されたという国務長官の報告書も収録されている。JACAR：B07090873900、日清戦役二際シ清国政府ニ於テ本邦人ヲ間諜ノ嫌疑ヲ以テ拿捕一件（5-2-7）（外務省外交史料館）。

³⁶ 前掲中野寿吉『生芻一束』。

³⁷ 前掲『詩文』3巻101集。

一方、上野羊我なる人物によって編まれた「福原林平蛮敵ノ惨刑ニ逢フ」では、処刑当日の様子が詳しく描かれ、福原が最後に写真を郷里に送ることを請うたこと、「福原大ニ哭ス、其情父母ヲシテ聞カシメバ悶絶応サニ堪ヘザラン」という様子であったことを伝えている³⁸。

のちに編纂された黒龍会編『東亜先覚志士紀伝』ならびに東亜同文会編『対支回顧録』所収の福原伝では、以上の伝記の他に新たな資料も加えられ、福原の捕縛から処刑、さらに戦後遺骸が送還されるまでの経緯が記されている。まず『東亜先覚志士紀伝』所収の福原伝では、「支那側では…、残酷なる拷問によつて口を開かせようと、肉破れ骨砕くる底の拷問を加へたが、兩人とも毅然として屈せず…」、最後は「立会の支那官憲をハツタと睨みつつ得意の支那語を以て「汝等知らずや、我が大日本帝国は万世一系の天皇陛下の統治し給ふ神国である…」」と大声叱呼し、「従容として獄吏に首を授けた」という³⁹。一方の『対支回顧録』所収の福原伝では、「逃れるだけは逃れんと思ふがまま、君はひたすら怯懦漢を粧ひ」、最後は「潔く決心を示し、切りに写真一葉を撮り、之を故国の老親に送らんことを懇請して止まなかつたが、終に聴く所とならず、同列の志士楠内と共に、身首処を異にした」という⁴⁰。このように、この両者の伝だけを見ても、異同が少なくない⁴¹。

さて、この福原に関する一件は、中国でも相当に注目されたようで、中国側のメディアで連日のように報道がなされていた。清末の上海で創刊され、近代中国の最も代表的な新聞である『申報』では、福原がアメリカ領事館から中国側に引き渡されて以降、処刑に至るまでの経緯が、以下の通り、詳細に報じられていた。これらの報道は戦時中のもので、しかも伝聞に拠るものも少なくないが、情報源が不確かな場合は往々にしてそのことが断られており、どの程度信頼できる情報であるかも含めて、この1か月余りの福原の動静を逐一我々に伝えてくれる。

「研訊日奸〔日本の悪人を詳しく取り調べる〕」(1894年9月5日、3版)

「補述日奸帰案縁由〔日本の悪人身柄引き渡し経緯補説〕」(1894年9月6日、3版)

「密訊倭奸〔倭の悪人を秘密裡に取り調べる〕」(1894年9月12日、3版)

「又訊倭奸〔再び倭の悪人を取り調べる〕」(1894年9月13日、3版)

「倭奸起解〔倭の悪人の身柄が移される〕」(1894年9月15日、3版)

「倭奸解省〔倭の悪人の身柄が省に移された〕」(1894年9月20日、2版)

³⁸ 前掲上野羊我編『征清美談 教育勅語』、131-143頁。処刑当日の記述は、出典が示されないが、明らかに後述する中国側の報道に拠ったものである。ただし、手紙（「写信」）を「写真」に、手紙を代わりに送ることに同意した中国側官吏を「獄吏ハ冷笑一番…汝自カラ回送スベシ」と訳すなど誤訳や改ざんと思われる箇所がある。

³⁹ 前掲黒龍会編纂『東亜先覚志士紀伝』上、434-446頁。

⁴⁰ 前掲（東亜同文会）対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』下巻、587-590頁。

⁴¹ なお、戦後、福原の遺骸が送還されたことについては、概ね記述が一致しており、同一の資料に基づいたものと考えられる。最も記述が詳しい同上の福原伝に拠れば、日清戦後、政府が上海総領事珍田捨己に命じて福原の遺骸を受領させた際、その任に当たった山崎書記生が作成した報告書が存在するというので、それに拠ると、福原と楠内の二人は処刑後幽霊となって江寧県知事胡庭琛の夢枕に立った、ということである。管見の限り、この報告書の存否は不明である。

「訊奸耳食〔悪人取り調べのうわさ〕」(1894年10月1日、2版)

「倭供志略〔倭人供述の大略〕」(1894年10月3日、2版)

「審訊倭奸確供〔倭の悪人を尋問し確かに供述させる〕」(1894年10月5日、2版)

「死期将至〔死期がまさに至ろうとしている〕」(1894年10月11日、3版)

「倭奸正法〔倭の悪人の死刑を執行する〕」(1894年10月12日、2版)

これらの報道に拠れば、まず福原と楠内は9月3日(新暦、以下同様)にアメリカ総領事より中国側に引き渡された。これは総理衙門(外交を掌る中央官庁)と協議したアメリカ公使が「邦交を敦篤^{あつ}うし、大局を顧全」しての措置であったという(9月6日報道)。両名は上海県の西花庁なる場所に拘留され、「飲食の供待、亦た菲薄^{うす}からず」だったとのことである(9月12日報道)。取り調べは江海関(上海海関)道の道員(省以下、府以上の官)である黄幼農が通訳官とともに行き、詳細な尋問が夜間まで続いた(「研訊更漏三催」、9月13日報道)。これが繰り返され、ついにスパイとして軍務を探ろうとしていたこと(「充作奸細、探聴軍務」)を認めたといい(9月15日報道)。ここに二人は兵船で南京まで護送され、南洋大臣(南部沿海の通商、海防等を掌る)で両江総督の劉坤一の処置に委ねられることになった。出発前の二人は「恐懼異常にして、涕淚^{こも}交ごも下り、憐れむべきと覚ゆるに似たり」という状況であったという(同上)。

9月16日、二人は南京に到着(9月20日報道)、劉坤一から委任された両江營務処(督撫麾下の軍務を掌る)会辦で道員の陸春江、洋務局総辦で道員の羅少耕等によって引き続き厳しい取り調べ(「嚴訊」)が行われた(10月3日報道)。その結果、楠内は「もと上海に在りて洋行を設く、此の次国家の命を奉じ、軍情を探聴するもの共せて三十八人有り、我が二人を除きて外、尚お三十六人有り、均しく各処に在り、探ぬること竣わり国に回る。我れ祇だ吉林の地図^{えが}を繪き、並びに各海口の砲台、險要の処を探明せんとす…。已に獲住せられ、国が為に事を辦すれば、惟だ一死有るのみ、以て我が国に報いん」等と供述、一方の福原は「我れはれ読書人なり、今年二十二歳、茲に年幼に因り、利害を知らず、楠^{マツ}内友次郎の聘を受け、幫^{たす}けて筆札、繪図等の事を司る。家中に尚お老母有り、超豁すべきや否や〔多めに見ることはできないか〕」と供述したという(10月5日報道)。日清戦争時、敵情探査の任に当たったのは、日清貿易研究所関係者に限れば14名(うち9名死亡)であり、合計38名であったかどうかは不詳⁴²。また福原は刑死当時27歳であった。このうち福原は、「供詞〔供述〕狡展たりて〔ごまかそうとしており〕、死を免れんことを意図す。深く恐るらくは楠^{マツ}と串供〔共謀〕して翻案〔決定を覆す〕せんことを」と警戒され、楠内と別れてそれぞれ江寧県と上元県に収監されたという(10月11日報道)。この間、二人の供述は両江総督劉坤一へと報告

⁴² 前掲松岡恭一、山口昇編『沿革史』、159頁。なお、日清戦争が始まると、参謀本部は中国語のできる者を清国、国内から総動員し、こうして参謀本部、陸海軍付の通訳官となった者は300名以上にのぼったという。小林一美「明治期日本参謀本部の対外諜報活動—日清・義和団・日露三大戦争に向けて—」(藤維藻等編『東アジア世界史探究』汲古書院、1986)、397頁。



図4 「嚴鞠倭奸〔倭の悪人を厳しく尋問する〕」
 (出典)『点石齋画報』光緒20年8月25日(1894年9月24日)

され、さらに劉から皇帝へと上奏され、まもなく刑が執行されようとしていた⁴³。なお、この間の取り調べの様子は、『申報』を発行する申報館から同じく発刊されていた旬刊の絵入新聞『点石齋画報』にも取り上げられており(図4)、関心の高さを窺うことができる。

こうして、1894年10月8日(光緒20年9月10日)、ついに刑が執行されることとなった。当日の

⁴³ この間の具体的な経緯は、劉坤一がつとに1894年9月7日(光緒20年8月8日)に電奏を送り、楠内と福原の二人が軍事情報を探查しようとしていたことについて皇帝に上聞している。「迭拠滬道研訊、倭奸憫〔ママ〕内一名、供認係日本人小村囑為転報軍情、未報、被獲、其福原一名、甚狡展、迨示以本人所写暗处字拠、初供欲探北路軍情、尚未赴津、被獲等語云、除飭令訊結稟報外、謹聞、坤齊」、故宫博物院編『清光緒朝中日交渉史料』(1932)、巻19、24丁表。

これに対して翌日皇帝が下した諭旨は、すでに軍事情報の探查を認めているのであればスパイであることは疑いなく、具体的な供述を取った上でただちに処刑せよというものであった。「奉旨、劉坤一電已悉、倭犯憫〔ママ〕内、福原二名、既經供認探報軍情、其為奸細無疑、著劉坤一飭令江海關道取具供詞、即行就地正法、欽此、八月初九日」、同上巻19、27丁表。

こうして楠内、福原に対する尋問がさらに続けられた後、1894年10月8日(光緒20年9月10日)に処刑が執行された。翌日の劉坤一の軍機処に送られた電奏にその旨が伝えられている。「倭奸楠内、福原兩名、已遵旨、審明正法、請代奏、坤蒸」、同上巻21、31丁表。

様子は、およそ次の通り、詳細に報道されていた。すなわち、鐘が11時を知らせると、江寧県署に公文が届けられ、しばらくして趙知県が上元県署に赴き、連行役の蔡少尉なる者が下役人とともに監房に入り、今日もまた取り調べを行う、一か所で行うため楠内と会えるだろう、例のごとく手錠等を身につけよ、と福原に伝えた。福原は喜んで監房を出、準備されていた小轎に乗った。華人の服装にならい、剃髪していたが、辮髪は結っておらず、革靴を履き、日本のひとえの上着を着、鎖でつながれていた。内橋まで来ると、沿道の見物が道を塞ぐほどであり、異常を察した福原は轎から下りようとし、今日私を殺すのだろう、しかし郷里の父母はこのことを知らないので、手紙を書くのを許せ、と述べたが（「容我写信寄回」）、役人は許さず、道を急いだ。上元県署の前に至ると、見物人はますます多く、足の踏み場もなかった。福原は留置所に置かれ、たちまちダーンという合図とともに、麒麟門が開き、総督の伝達役の官が両江総督の発令のしるしの小旗を捧げて出てくると、文武の各官がその後随って広間に至り、発令の小旗を高く掲げた。監督の官である両江営務処曾道員、洋務局羅道員、江寧府陳知府等が公座につき、下役人が楠内と福原二人（「二犯」）の名を唱えると、獄吏が二人を連れ、広間に至った。二人は依然として倔強であったが（「二奸依然倔強」）、命じて跪かせた。福原は手紙を国に書くことを請うと、官は汝に代わって書こうと言った（「官謂代汝写去」）。号令の音が響くと、二人の服を剥ぎ身を清め、法のごとく身体を縛った。楠内は年29歳で、なお白面の書生のようにあり、魂がすでに半分抜けてしまったようであった（「魂靈兒已飛去半天」）。福原は声を上げて泣いていた（「大哭不止」）。斬刑の判決が下されると、一発の砲声が響き、軍官が先行し、銃兵隊を率い、継いで高位の軍官が発令の大旗と五色の四方旗を率い、馬上に武器を持つもの数人が後ろから護送し、また大刀隊、鋼叉隊が、刃の閃光鋭く、二人（「二倭奸」）を取り囲んで行き、一高位の軍官が刀を持って後ろから護送し、継いで発令の小旗、三大營2名の道員、知府および上元・江寧両県の知県が最後に控えた。笄橋市の保長は予め蘆席を備え、死刑執行人（「劊子手」）の范老人なる者もすでに待機していた。先頭が到着し、南は評事街から、北は木料市まで、通行人を阻止すると、瞬く間に、銃声が放たれ、二人はすでに首と体が処を異にしていた。両知県は保長に命じて直ちに遺体を棺に納め（「收殮」）、朝天宮まで運んで埋葬し、各官は車に乗り、それぞれ役所へと帰った。時はすでに午後になっていた、という（以上、10月12日報道）。笄橋市はかつての南京の繁華街で、衆目に晒すために処刑が行われた場所であった。朝天宮は今も南京に残る一級の古蹟である。なおこの時の様子も『点石齋画報』に絵入で詳しく報じられている（図5）。

以上、福原が中国側に身柄を引き渡され、処刑に至るまでの経緯を、中国メディアの報道を通じて見てきた。一方、こうした事実関係を伝える報道以外に、この件に関連する論説記事もいくつか報じられている。それらはいずれも『申報』の第一面に掲げられたもので、この件に対する中国での関心の高さを窺わせるものであった。最後に、これらの記事の内容を確認し、福原のこの一件がどのように中国で受けとめられたかについて、さらに踏み込んで見ておきたい。



図5 「倭奸正法〔倭の悪人の死刑を執行する〕」
 (出典) 『点石齋画報』光緒20年9月26日(1894年10月24日)

まず、それらの論説記事を列举すると、以下の通りである。

「嘲倭篇〔倭人を嘲るの篇〕」(1894年9月17日、1版)

「安置倭奴芻議〔倭の悪人をいかに扱うかの鄙見〕」(1895年1月6日、1版)

「論行軍以間諜為先〔軍を進めるにはスパイを先にすべきを論ず〕」(1895年1月11日、1版)

「嘲倭篇」は、福原が中国側に身柄を引き渡されて間もなく、上海で取り調べを受けた頃に掲載された論説である。タイトルに見える通り、この論説は戦時下において日本への敵愾心を露わにするもので、スパイを用いる日本の手口を嘲るものである。すなわち、「ああ、倭人は素より剛暴を以て著名なるも、茲に何ぞ竟に畏^{おそ}れ無能たること此くの若きや。夫れ両軍相い見え、硬寨^{とどめ}を築め〔強固な軍隊を駐屯させ〕、死仗を打ち〔死闘を繰り広げ〕、敵を殺し果を致すは、何等〔なんと〕正大堂皇〔正々堂々〕として、間諜を以て情形を窺^{うかが}伺い、鼠窃狗偷して〔ねずみや犬のようにこそこそ盗みをし〕、東張西望する〔きよろきよろあたりを見回す〕を必せん。識者已に之が為に齒^い冷し〔あざ笑い〕、其の堂堂正正に非ざるの師〔正々堂々としていない軍隊〕を鄙^{いや}しむ。間諜に

至りては、既に禽^マに就き〔捕らえられ〕ては、則ち奮いて身を顧みず、頸を延ばして戮を受くる〔潔く死刑を受け入れる〕は、猶お血性〔気骨ある〕の男子たるを失わず、之を史冊に伝え、自ずから百世に流芳すべきがごとし。乃ち本報の紀す所に観るに、倭奸福原及び楠^マの為す所は則ち死を畏れ生を偷^{ぬす}み、憐れみを刃下に乞う。其の迹、婦人女子に近似し、誠に鄙しむべくして亦た憐れむべからずや」と述べる通り、ことさらにスパイ（「間諜」）を用いることの卑劣さをあげつらうものであった。先の図4に描かれた福原と楠内もまた、こうした蔑みと憐れみの対象として描かれたものであっただろう。

しかし、彼らの処刑後に掲載された論説では、その論調は大きく変化していた。「安置倭奴芻議」と「論行軍以間諜為先」が掲載された1895年1月には、すでに前年9月に北洋艦隊が大打撃を受けた黄海の海戦の結果が国民の間に伝わり、中国人心に一大動揺を生ぜしめていただけでなく、日本軍による九連城占領（10月26日）、鳳凰城占領（10月30日）、金州占領（11月6日）、大連攻略（11月7日）、旅順占領（11月20日）などのニュースも伝わっていた⁴⁴。こうしたなか掲載された「安置倭奴芻議」は、直接的には利敵行為を行う恐れのある日本人居留民をどのように扱うか、ということ論じたものであるが、あわせてスパイ行為に対する見解が示されている。すなわち、「屢^{しば}ば倭奴の日報を閲したるに、詳しく中国の一举一動を載せ、了^{あき}らかなること指上の螺紋の如からざる無し。特だに各省の軍情、電に由りて飛達せざるなきのみならず、甚しきに至りては、宮禁森厳の地〔宮中などのおごそかなところ〕に凡そ事故有るも亦た皆な諸^しれを簡牘〔書籍〕に登し、詳尽して遺す無し。色然として〔顔色を変え〕以て駭^{おどろ}くを禁ぜず、曰く、是れ有るかな、倭奴の用うる所の間諜何ぞ竟いに此くの若きの多きや、と。…滬上〔上海では〕向に日清貿易研究所有り、専ら倭奴の子弟を教えて我国の文字語言を学習せしむ。故に凡そ間諜を作すの人、大半材を所内^マに取る。華官厳しく遍布せる線人〔内通者〕を拘捕するを行いしより、楠^マ内友次郎、福原林平の二倭奸^{もち}を將て訊明して法に正すを得…」と述べられる通り、ここには日本の情報収集力の高さへの驚きとともに、それまでの嘲笑とは異なる、深刻な危機感が表明されるに至っている。さらに、こうした日本の諜報活動と諜報活動を防ぐための厳しい処罰規定を紹介した上で、「我が堂堂たる大国を以て断じて法を倭奴^{なら}に効^{いさぎよ}うを屑しとせざるも、然れども竟に大度〔度量が大きく〕寛容にして、若輩の四^よもに偵訪に出づるに任せ、我が秘事を將て彼の敵營に告げしむれば、豈に我が軍謀をして秘蔵すべき無くして、一切更に棘手〔手こずる状況〕^{あら}を形わしめざらんや」と述べられ、不承不承ながら、日本のこうした情報戦にならざるをえないとの考えが表明されるのである。

この「安置倭奴芻議」から5日後に掲載された「論行軍以間諜為先」は、こうした考えがさらに徹底されたものである。すなわち、当初のスパイを一笑に付した態度を一変させ、スパイ（「間諜」）が不可欠であることを論じるものである。その冒頭ではまず、「今、天下は一の強弱相い凌

⁴⁴ 佐藤三郎『近代日中交渉史の研究』（吉川弘文館、1984）、159-184頁。

ぎ、大小相い呑むの局なり。勢い既にして相い争うに処すれば、其の機は自ずから争いに出でざるを得ず。顧みるに、之を已発に争うは、之を未発に争うに若かず。之を有形に争うは、之を無形に争うに若かず。蓋し、已発に争い、有形に争うは、終に事事人の後に落つるを免れず、固より未発に争い、無形に争い、以て独り勝算を操るを得るに若かざればなり」と述べられ、すでに弱肉強食の世界で争いが不可避である以上、「未発」「無形」の争いに勝利すること、つまり予めスパイによる情報戦に勝利することの重要性が説かれるのである。こうして『孫子』や『春秋左氏伝』といった中国の古典を引きながら、中国でも「間諜の靡さざるは昔より已に然り」と述べられ、また独仏の戦い（普仏戦争）でドイツが勝利した理由も、「未だ始めより間諜の功に非ずんばならず」と述べられた。さらに日本のスパイ活動については、「江南は則ち楠訥友次郎、福原林平を将て、天津は則ち石川〔伍一〕を将て、先後して明正典刑〔死刑執行〕し、而して倭奸始めて稍や跡を斂む。夫れ彼の間諜を以て我が軍情を探るは、誠に厳しく之が防ぎを為さざるを容れず。…然れども地を易えて以て言わば、将に彼の国の意向の在する所、虚実の分かるる所を知らんと欲すれば、則ち亦た間諜を用いざるを得ず」と述べられるように、それは当然厳しく防がなければならないものではあるが、立場を代えて言えば、それは用いないわけにはいかない、とみなされたのである。この一文の最後は『孫子』の「彼を知り己を知らば、百戦百勝」、『三国志』の「用兵の道、心戦上と為し、兵戦之に次ぐ」といった古言が引かれ、あらためてスパイの必要が説かれるのであり、ここに中国でも、当時の通信技術やメディアの発達に応じた情報戦の重要性が認められるに至った、と見ることができるだろう。

おわりに

福原林平は閑谷巒で西毅一から授かった中国に対する志を胸に上海へと渡り、日清貿易研究所では、その日記『随感随録』に見えた通り、所長根津一から教えを授かり、また郷里からの支援も受けながら、非常な意気込みで勉学に励んでいた。しかし、日清戦争下で偵察活動に従事し、上海で捕らえられ、最後は南京で非業の死を遂げた。こうして福原が若くしてこの世を去ったことで、福原に志を託した師の西毅一が「失望落胆」したことは言うまでもないだろう⁴⁵。日清貿易研究所所長の根津一も、福原等同研究所の関係者9名が命を落とした際には、「嗚呼予は実にかの九人を殺せり」と顔を掩ったという⁴⁶。

もっとも、福原が命を賭した日清戦争によって歴史は大きく動き始めた。「吾が国四千余年の大夢の喚醒は、甲午の戦敗〔日清戦争の敗北〕より以後始まるなり」とは、近代中国の変革をリードした知識人・梁啓超の言葉であるが⁴⁷、この言葉に違わず、中国では日清戦争を契機に、抜本的な

⁴⁵ 前掲西毅一『薇山遺稿』下巻、「龍太に与ふる庭の訓」。

⁴⁶ 前掲東亜同文書院瀨友同窓会編著『山洲根津先生伝』、50頁。

⁴⁷ 梁啓超『戊戌政変記』（1898、同『飲冰室合集』6、中華書局、1989）、1頁。引用箇所の一部を省略した。

改革運動や革命運動が次々と起こった。福原の死も、こうした中国の変革のうねりを呼び起こす一つの呼び水となったであろう。すでに見た通り、福原は中国のメディアで大きく取り上げられ、当初は嘲りの対象として見られたが、最後は情報戦の重要性が認識されるとともに、敵ながら一目置かれるに至った。しかも、福原のこの件に関わる問題は、戦時中のメディアで取り上げられたばかりでなく、戦後、中国で変革の動きが強まるなか、改革派知識人による真摯な思索の対象ともなった。鄭観応『盛世危言』は清朝末期のベストセラーであり、当時、変革を志した知識人の必読の書として、若き日の毛沢東も愛読したという⁴⁸。この書のなかの一篇はその名もまさに「間諜」であり、これもまた「彼を知り己を知らば、百戦殆うからず」という古言を引きつつ、戦いを有利に進めるためには適切なスパイを用いる他ないとして、その重要性を訴えるものであった。そして、この議論を補強するために、付録としてここに掲載されたのが、福原について言及される上述の『申報』の論説「論行軍以間諜為先」であった⁴⁹。こうして、福原が身を以て示した近代的な情報戦の重要性は、ベストセラー書籍を通じて、広く中国知識人の認識するところとなったのである。

日清貿易研究所の設立者であった荒尾精や根津一は、日清戦争に際し、事ここに至っては一戦して真の親善を図り、提携して東洋の大局を維持する、と考えていたようである⁵⁰。つまり、一戦によって中国に変革を促し、その後、日中が協力して富強を実現し、西洋列強からアジアを守る、という考えである。この考えを貫くために、荒尾は日清戦争の勝利に際しても、清朝に領土の割譲と賠償金の支払いを求めなかった。結局のところ、日本は領土も賠償金も手にしたが、しかし荒尾や根津のこの企図は半ば的中し、日清戦争以降、清朝滅亡までの間は、「黄金の十年」（ダグラス・レイノルズ）と称されるほど、日中間の緊密な関係が実現した。上述の通り、中国は日清戦争を契機に抜本的な改革を進めるようになり、日本はその中国の改革に対して種々の協力を行ったのである。福原がもうすこし長く生きられたなら、同じ西門下で日清貿易研究所の同窓生であった白岩龍平や河本磯平がそうであったように⁵¹、彼もまた中国の維新の志士たちと心を通わせ、「東方君子国の力を以て、赤崑州治平の天地を開拓せん」という西の宿志を遂げるために奔走していたことだろう。

中国に志を抱き、中国で学んだ福原が、平時にその培った能力を発揮できなかったことは、何とんでも残念なことであった。とはいえ福原は、「反面教員」（毛沢東）であったかもしれないが、中国で大いに注目され、中国の変革のうねりを呼び起こす一つの呼び水となったのである。こ

⁴⁸ 佐藤慎一「鄭観応について1—「万国公法」と「商戦」—」（『法学』47(4)、1983）参照。

⁴⁹ 鄭観応『盛世危言』14巻本（1895、夏東元編『鄭観応集』上冊、上海人民出版社、1982）、918-922頁。

⁵⁰ 荒尾の日清戦争時における中国観をよく示す「対清意見」、「対清弁妄」等は、東亜文化研究所編『東亜同文会史』（財団法人霞山会、1989）、113-168頁等に見ることができる。また根津のそれについては、前掲東亜同文書院瀨友同窓会編著『山洲根津先生伝』、47-73頁参照。

⁵¹ 中村義『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯—』（研文出版、1999）、村上節子「河本磯平の生涯」（『閑谷学校研究』9、2005）参照。

の意味では、福原は中国の富強を支援しようとした西の宿志を大いに果たしたのだ、ということもできるだろう。

〈謝辞〉

本稿で紹介した史料『随感随録』の利用を許可して下さった福原家の方々と、その利用のために多くの便宜を図って下さった文化史研究家の村上節子氏に、感謝の意を表します。